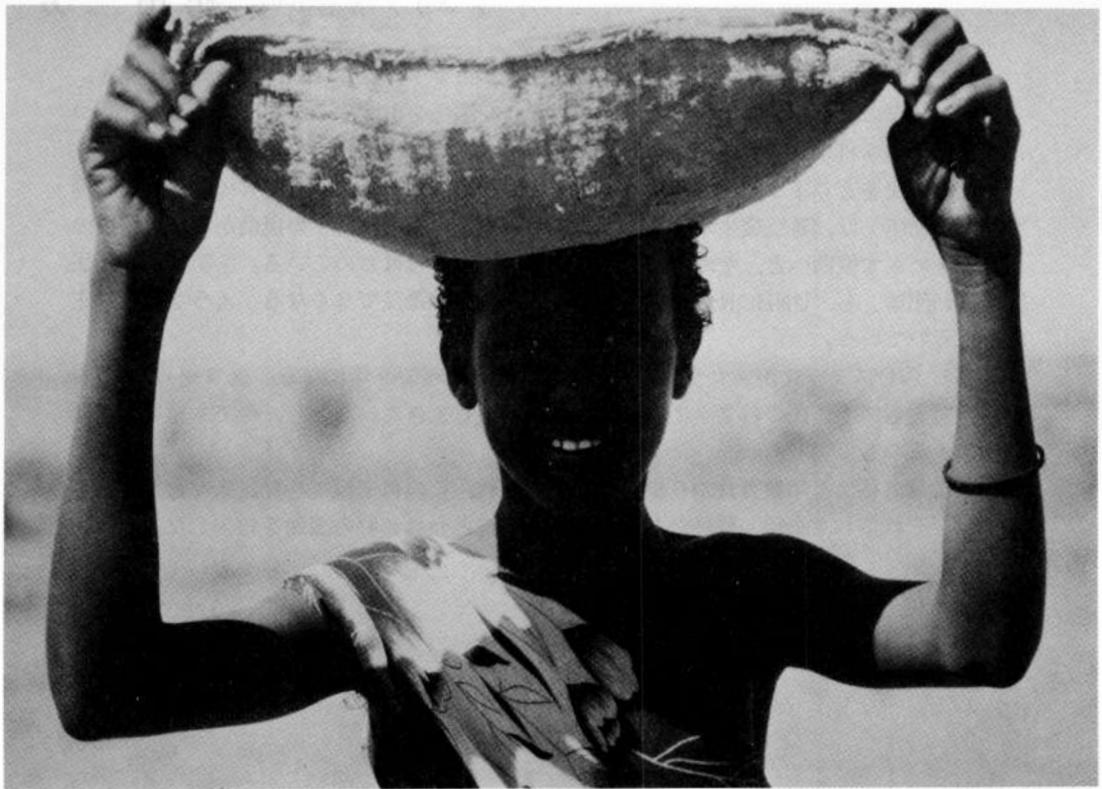


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.79

試 行 錯 誤



道で出会った少女

特集 ルーク農場の変遷

ルーク農場の変遷と未来	2
農業は定住の基盤だ	6
<インタビュー> 創価学会平和委員会 前田国重さん	11
オレたちもがんばっているぞ!	12
できれば、帰りたいさ	14
ラオスプロジェクト開始に向けて プロジェクトの合意	16
JVCNEWS	18

ルーク農場の変遷と未来

ソマリア事業担当 舘田三芳

4月1日から、エチオピアとソマリア両国代表がモガディシュにて合同委員会を開き、4日、1977年のオガデン紛争以来断絶していた外交関係を再開することで合意した。じつに紛争発生から11年、難民流入から10年ぶりである。

また、難民をとりまく固定的な状況にも変化が現われてきた。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、難民発生からつづけてきた「難民の生命維持」の援助から、「難民の自立」をめざす援助へと、その内容をより具体的に実行しはじめている。さらにNGO（民間非営利団体）も、UNHCRと歩調をあわせ、「難民が難民でなくなる」ような活動に主力をそそいでいる。

2名のJVCスタッフがソマリアに入ってちょうど今年で5年になる。プロジェクトの規模、内容ともに「難民の自立」に向けて大きく前進してきた。しかし、今でも重要な課題を内包するのも事実である。

今年1月、私は1年数カ月ぶりにソマリアを訪れ、この目で現場を見、人々と話し合ってきた。それらもふまえ、難民たちをとりまく状況とわれわれの課題を報告したい。



トウモロコシの取り入れに忙しい農民（ユニット7）

表1. ソマリアの国際収支

(百万ドル)

	1980	1981	1982	1983	1984
貿易収支	-327	-308	-347	-350	-344
貿易外収支	-8	-1	9	4	-47
移転収支	200	214	207	199	246
(民間)	(57)	(64)	(50)	(51)	(72)
(政府)	(143)	(150)	(157)	(148)	(174)
経常収支	-135	-95	-131	-147	-145
資本収支	87	79	84	68	23
(民間)	(-)	(-)	(-39)	(-32)	(-23)
(公共)	(87)	(79)	(123)	(100)	(46)
誤差脱漏	21	3	3	-7	-17
総合収支	-27	-13	-44	-86	-139

(出典) Performance of the Somali Economy in 1984,
Ministry of National Planning, June 1985/世界銀行/IMF 推定

(注) 貿易収支の大幅赤字を移転収支(海外からの贈与援助と海外での出稼労働者の送金)、及び公共部門による海外からの中長期資金の借入によって補うような実態がある。

国交の再開

4月5日、新聞各社の紙面に「エチオピアとソマリアが国交再開で合意」と大きくのった。それによると、①国境周辺に配置されている両国の軍隊を今年5月15日までに撤収、②捕虜の交換、③相手国内にある反政府組織への支援や相手政府への中傷をやめることで、基本的な合意に達したという。この背景として、両国とも深刻な国内問題をかかえ、その解決を優先しなければならない事情がある。

この合意によって、両国の関係修復は期待できよう。しかし、ソマリアにいる難民がすぐにも故郷エチオピアに帰り、難民問題が根本的に解決するようないことが起きるのだろうか？

限られる本国帰還者

1986年12月から再開された本国帰還プログラムによって、今年1月までに4501人がエチオピアに帰った。UNHCRでは今後もつづける予定であり、両国の国交再開がこれを促進するであろう。しかし、公称87万といわれる難民のほとんどが帰還できるとは私には思えない。

ご存じのように、エチオピア国内では飢餓が再び拡がっている。とりわけ北部の被害が深刻である。このためにエチオピア政府は、北部の住民を南西部へ移住させる再定住計画を続けている。このような内情を考えれば、一度エチオピアから流出した84万人もの難民、それも現政権に銃口をむけたソマリ族の彼ら全部を受け入れるだろうか。われわれJVCス

タッフが、すでに帰還したはずの難民が何人かキャンプに戻っているのを見たという。たぶん帰還先での生活がうまくゆかなかったのであろう。

もちろん、少なくとも従来程度の規模で本国帰還プログラムは続けられるであろうし、その意義は認められる。だが、他の解決方法も取らねばなるまい。

UNHCRの新たな方針

今年3月、ついにUNHCRは、「食糧配給を徐々に停止する」と公表した。もちろん、この計画の前提には、「難民たちが援助を受けずに食っていく道を与える」ことがある。実際、当面もっとも可能性の大きいのはソマリア国内で農業を営むことであろう。UNHCRの今年の指針にもこの点が明確に打ち出されており、具体的には、自立を前提にした農業プロジェクトを行うNGOを優先的に支援するとともに、世界銀行(World Bank)の資金をもとに大規模な「ファルジャノ定住計画」もすすめるという。ファルジャノはシュベリ川下流にあり、農業に適した土地ときく。

またUNHCRは、難民救助のためにソマリア政府の下部機関として設立された、RAU(注1)やIITT(注2)などへの支援を低減し、これらを管轄各省に統合するという、思いきった方針も打ち出した。ソマリア政府がこの方針をのむか否かは分からないが、その方針は評価に値する。

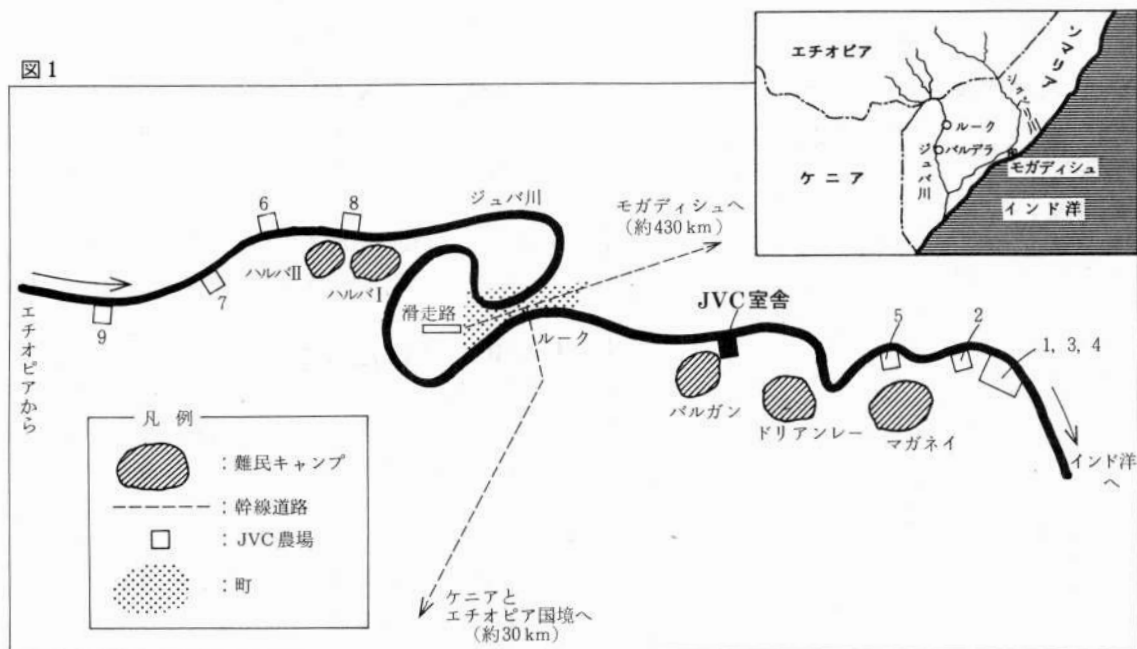
本国帰還に比べ、ソマリア国内での定住の方がより現実的であると思われるが、その際に忘れてはならない点がある。それは、数10万もの難民を受け入れるソマリア国内の厳しい経済状態である。慢性的な貿易赤字はその一例である。(表1)

したがって、難民の国内定住を成功させるには、難民にのみ援助の恩恵が届くのではなく、もともとソマリアに住んでいた人々にもその恩恵が波及するような活動を行うべきであろう。この点を十分考慮するならば、「難民だからUNHCRが」という縦わりの発想から一歩踏み出て、他の国連機関やNGOなどとも協力し合い、農業以外の分野へも多面的に展開する必要がある。

ルーク農場の変遷

プロジェクトの開始当時から、われわれは、一つの夢を実現しようと努力してきた。それは、異なる部族を入植させ、協力して農場運営を行うことであった。つまり、「一つの農場を共有することで部族

図 1



問題を越える」ことである。まさにそれは、全地球的な問題の解決にも何らかの糸口を与えてくれるものと考えてきた。

現在まで9カ所の農場を建設してきたが(図1), その内ユニット1, 4, 5が異部族混成である。大きな夢をかけただけ、逆にこれらの農場は問題が多い。特にJVCが初めて手がけたユニット1は、異部族混成というリスクにくわえ、年老いた農民たちが多く土地も痩せているなどの悪条件が重なり、昨年9月、一時的に農場を閉鎖せざるをえなくなった。そして今年1月、再び農民たちを選抜したのだが、部族問題が起きて、この農場は土地を提供してくれた地元民に戻すことにした。ただ、ユニット4と5は、ユニット1の反省にたって建設したため今では重大な問題を抱えていないので、異部族融和の夢は消えていない。

ところで、これまでの経験からわれわれが学んだのは、部族問題の難しさだけではなかった。もうひとつの点は、「与え過ぎも問題だ」ということである。われわれは、「難民に何かしてやろう」と勝手に思い込み、また時間に追い立てられ、本来必要がなかった援助や協力までもとかく行いがちである。その後に残るのは、疲れと多額の出費、そして難民の依存心であるにもかかわらず。

この2つの教訓から、われわれはグループ・ファーマーリング方式に移行した。JVCが農場を造ってから難民に分配するのではなく、自主的に農業を始めようとするグループに最小限の協力をする方式である。JVCは、ポンプ、ディーゼル燃料、農具などをロー

ンで提供したり、水路などの建設、営農指導などを行うだけである。彼ら難民たちは、数年以内にローンをJVCに返済しなければならない。したがって、比較的安いコストで多くの農場を迅速に建設でき、彼らの自立心を促進させる効果もある。ここ1, 2年で農場拡張がすすみ155haとなったのはこのためである。

とはいえ、利点ばかりではない。この方式は、援助依存症になってしまった難民をプロジェクトにまきこみ難い点がある。つまり、やる気のない難民を切り捨てかねないのである。また、難民たちとの密接なコミュニケーションがなくても、それなりにプロジェクトはすすめられる。そのために、彼らが難民になった背景や深刻な問題など、彼らの「心の深部」をわれわれは理解できないことがある。

生活を支える女と子ども

女性たちと子供たちの存在をぬきにして、難民たちの将来は考えられない。

難民キャンプでは壮年男性の割合が非常に低く、ほとんどの男たちは大して働かない。もちろん、働く機会が制限されているのは、多かれ少なかれ、どの難民キャンプも同じである。しかし、日々の生活までは誰も面倒をみてくれないので、女性と子供(特に女子)の労働はあまり減らない。難民キャンプの生活は外部からの援助と女子供によって支えられている、と言っても過言ではない。

そこでJVCは、彼女ら女性と子供たちをターゲットにしたプログラムも拡大してきた。現金収入をえる

手助けとしてのインカム・ジェネレーティング、技術的トレーニングや補助的教育などを目的としたコミュニティ・サービスである。具体的には、パン屋、かじ屋、水屋、帽子通、焼き物クラス、英語クラスなどである。希望者も多く順調に運営されている。

まだまだ微々たる収入であり、教育効果が現われるまでには時間がかかるが、難民たちがソマリア国内に定住するうえで、その基礎になりえると思う。

木が育つ、しかし木々は消えていく

農場ばかりでなく、マガネイ難民キャンプの約80%にも植林した。この地に適した外来種をJVCが育苗し、各難民の家庭に配った。水やりなどの面倒は彼ら自身が行っている。うっそうと茂るまでには何年かかるだろうが、先が楽しみである。

いっぽう、1年数カ月ぶりに訪ねたこともあろうが、昔からこの地にあったブッシュがキャンプからさらに遠くなったような気がした。外来種は1年もすれば、人間の背丈を優に越え、すぐ森になる。だが、長い目で見れば、この地に適した地元のブッシュの方がより大切である。

とはいえ、ただ手をこまねいて木々の喪失を見ているより、難民自身が少しずつでも身の回りに木を植えて育てゆく意義は十分あろう。

ダム建設

ソマリア政府は、世界銀行（World Bank）の協力をえて、ジュバ川下流のバルデラに多目的ダムを建設する予定である。うまく話がすすんでも7年近くかかるが、もし実現すれば、ハルバ難民キャンプ以北を除く、ほとんどの農場が水没する。図1を見ていただければ分かるように、ユニット1から5までが水没する可能性が大きい。

この影響は、われわれの活動を展望するうえで無視できないものの、いまだに調査段階であり、当面はその推移を見守りたい。

転換期を迎えたJVC

ここ1年ほどの間に、プロジェクトの規模、内容とも転換期にさしかかっている。また難民はもとより、JVCのプロジェクトを取り囲む状況も、すでに述べたように、大きく変わりつつある。

先の読みにくい時期であるが、当面は次のようにプロジェクトをすすめてゆきたい。

① グループ・ファーマーミング

難民たちの社会状況をより深く理解しつつ、この方式で受益者の数を増やす。われわれJVCの力量にもよるが、今後1年間で100ha前後の拡張を行う。地域は、比較的肥沃で未使用地の多いハルバ・キャンプ以北になろう。仮にバルデラ・ダムができて水没しないこともある。

また、単に農場を拡大するのではなく、アグロフォレストリー（注3）の促進や難民村（注4）の組織強化など、質的な充実も同時にすすめる。

② サービス圏域

インカム・ジェネレーティングおよびコミュニティ・サービスの分野拡大、さらに、それにともなう受益者の増加をはかる。とりわけ、女性や子供たちに焦点を合わせる。例えば、女性スタッフによる保健や食生活の指導などが考えられる。

③ 植林

農場はもとより、難民キャンプ内の植林も原則的に拡大する。従来はマガネイ・キャンプだけだったが、これに隣接するドリアンレー・キャンプやわれわれJVCスタッフが住んでいるハルガン・キャンプへも苗木を配る。

このような活動をつづけてゆく中でも、われわれは、JVCとしてのゴールを設定する時期に今さしかかっている。

難民問題と難民救援は、世界の諸問題と同様に、矛盾に満ちている。われわれは、この矛盾から目をそむけることなく、その解決と調和に向けて日々の努力を積み重ねてゆきたい。「難民が難民でなくなる」ように、そして「難民が生まれない社会にする」ために。

☆ ☆

（注1）RAU：Refugee Agricultural Unit. NRC（National Refugee Commission）の直轄下に入り、MOA（Ministry of Agriculture）の管轄にも入る。難民対象の農業プロジェクトを続けている政府機関。JVCも契約上はRAUの傘下にあるが、実際は独自の活動を行っている。

（注2）IITT：Institute of Inservice Teacher Training. 難民対象に小学校を運営している政府機関。RAU同様、NRCの直下に入り、UNHCRの資金を受けて活動している。

（注3）Agroforestry：農業と林業を融合したもので、農場を立体的に利用する方式。有機物の分解が早い低緯度地域や乾燥地域に特に有効と言われている。

（注4）難民村：難民がキャンプから自主的に出て、その周辺に造った小さな村。



3年前の農場(左)と現在(右)

農業は定住の基盤だ

中岡哲也 船川秀夫

司会：柴田久史

農場の拡張

柴田 今日はソマリアから帰国したばかりの中岡さんと船川君を迎えまして、ルーク農場の変遷について座談会を行いたいと思います。

私も1983年にソマリアに入りました、85年までいました。まずその当時と現在ではどのように変わったのか聞いてみたいと思います。私のいたころは農場は4カ所でしたが、今はどうですか。

船川 86年からマガネイキャンプの北側にユニット5が建設され、87年9月に開かれました。15ヘクタールを15家族が耕作しています。ソマリア政府の方針で、1家族1ヘクタールになりましたので。

柴田 ちょっと話は戻りますが、ソマリア政府の方針は過去2回変わっています。私が行く前はトレーニング農場として、1家族25平方メートルが与えられていました。83年2月からは1家族あたり0.5ヘクタールになり、自立に向けてソマリアへの定住を許可するようになりました。そして今は1家族1ヘクタールになったのですね。

船川 そうです。それからユニット6から9まで、87年度に建設された農場はJVCが直接手を下したのではなく、後に出てくると思いますが、グループ・ファームという方式で、農民たちが主体

となって作りました。

ユニット1から4まではJVCが主導して、開墾と水路建設はJVCが責任を持つ。農民の選出は難民と話し合い彼らが決めると。ただし、貧しい者とか他に職のない者とかJVCで条件をつけた。だから基本的にはJVC主導型です。ユニット5はそれまでのやり方とグループ・ファームの中間なんです。

中岡 ユニット6から9までのメンバーは自分たちで土地を探し、自分たちで伐り開いたというのが違います。今までの農場はJVCが与えたというような感じだったので、これが大違い。またメンバーも今まではマガネイキャンプの難民が中心でしたが、今はマグドールやハルバなどにも広がってきました。

やっぱり自分たちで求めて行った所だけにまとまりがあり、自分たちで責任を持ってやっています。
船川 農業だけでなく、コミュニティ作り、たとえば自分たちで村を作っていくという過程においても協力的になってきています。これはJVCのアプローチが変わってきたからだと思います。

今までは単にJVCに行けば何ももらえるということでトラブルが絶えなかった。何でJVCはくれないんだといって。自主的に行うこ

との動機づけにグループ・ファームは役に立ったと思う。

中岡 キャンプから出て自分たちでやっていかなければならないという厳しい条件下におかれるので、子どもでもいっしょに働いている。やはり一人一人の意欲が違う。キャンプの中にいる人には医療の心配はないが、セトルダウン（定住）したユニット6から9のメンバーに関しては病院も学校もだいぶ歩かないといわけます。

われわれは今までキャンプ内の人間だけを相手にしていたけれど、これからは外に出ていった人たちをいかに支えていくかということです。

船川 中岡さんがいったセトルダウンとは、JVCと農民が契約して、ゆくゆくは農場の近くに家を建て、農場を経営していくということです。

ポンプと土壌の保持が課題

柴田 僕たちがいたころはソマリア社会のことについて何も知らず、ずいぶん軋轢も多かった。今はどんなことが問題になっているの。
船川 ずっと同じようなことで悩んでいます。柴田さんのところと比べたらよくなっていると思います。政治的緊張も今は少ないし。

今の問題はポンプです。1つの

JVC 農場

農 場 (ユニット)	建設年	建設方法	対 象 者		面積 (ha)	家族数
1	1983	J V C 主 導	ヤ マ ン ガ ブ の イ ・ 難 ・ 民 キ	グループ・リーダーなど	14	14
2	1984			農業に関心のある者	13	26
3	1983			〃	12	24
4	1986			自分たちで選出	20	32
5	1987	中間型		〃	15	15
6	〃	(協 同 農 場) ア グ ル ー プ ・ フ ア ー ミ ン グ	ハ ル バ キ ヤ ン の 難 民 他	〃	25	64
7	〃			〃	20	20
8	〃			〃	16	16
9	〃			〃	20	25
					155	236

* ユニット6の家族数が多いのはこのグループの自主的取り決めによる。

農場にポンプが1つしかないの
それが壊れると農場全体がだめ
になってしまう。ポンプの管理は農
場を左右してしまうのです。

柴田 ほかに？ たえば収奪
農業でしょう。何も肥料をやらな
いし、あのサイクルでやっていた
らふつうだったら不可能でしょう。

船川 もともと遊牧の人たちだか
ら土地を所有し、そこにずっと住
むことをしてこなかったの、その
土地で農業をやり続けるという
ことには無関心です。気にしなか
ったらどんどん土地はだめになっ
ていく。彼らの農場も最初の収穫
の時は非常によかったのですが、
2年後、3年後にはずいぶん落ち
ました。JVCのモデルファームで
はソルガムや豆の間に緑肥をすき
こんでいて、この方法を荻ノ迫さ
んが農業教室で教えています。彼
らも非常に興味深く見ていますが、
それを実際にやるかどうかは別問
題です。

今JVCがやっているグループ・
ファームは、積極的に農業を
やりたいというグループがあるの
で非常にやりやすい。むしろこれ
からは技術的な問題に力を入れた
いです。

柴田 それでは一番の問題は土壌

で、それからポンプなんですね。

中岡 ポンプの使い方が荒いとい
うか、3年の寿命なのに通常の3
倍ぐらい使うので1年半で壊れて
しまう。ポンプ代を返し終わる前
に壊れてしまうんです。

柴田 塩害の方はどうですか。

船川 87年5月20、21日に大洪水
があってマガネイの農場はほとん
ど水没したんですね。もちろん作
物は全部やられましたが、塩害が
ひどいといわれていたユニット2
なんかは大水で洗い流され、心配
していたところが一気に解消され
てしまいました。これも大自然の
サイクルかもしれません。

柴田 農場は全部で155ヘクタ
ール。ユニット2は13ヘクタール
かな。ほかのところでは塩害は出
ていないの。

船川、中岡 そうですね。目には
見えて出てこないですね。

柴田 僕たちがいたころ定住する
とどんな障害が起きるか考えた。
土壌が問題になるだろうと思って
たけど、思ったよりもっている
という感じかな。ポンプは予想し
たとおり。虫はどう？ JVCのこ
ろだけ緑になると虫が大発生して
農場が全滅じゃないかと心配した
けど。

船川 たしかにJVCのところだけ
虫が集まっている感じはあります。
JVCでは農業は使わないけど隣の
農場はやってますから。タマネギ
なんかは多少影響あります。

柴田 僕は農業の専門家ではない
んだけど、漠然とこうなんだろう
と思っていたのは、いっぱい木が
あってその下で農作物を作るとい
うことだったのだけれど。今後、
どんなイメージで農場を持ってい
きますか。

船川 柴田さんのいわれたとおり、
方法としてはアグロフォレストリ
ーですね。「木のある農業」をめ
ざしていく。パパイアがあって、
マンゴーがあって、グァバがあっ
て、レモンがあって、そういうの
をもう実際にやっています。

1つの作物ばかり作ると価格も
不安定だし、虫にやられやすいし。
だから分散という意味も含めてい
ろいろな木があると害が防げる。
それから輪作ということで、メイ
ズやタマネギ、豆などを交替で植
えています。これは農民の間にも
定着しているし、非常にいいんじ
ゃないかと思う。

定住のイメージ

柴田 彼らも長期化に向けている
ということだね。僕たちがいたこ
ろは彼らもまだフラフラしていた
けれど、腰がすわったのかな。で
もやっぱり帰りたいたいと思ってい
るのかな。

中岡 帰りたくても帰れない。自
分たちで伐り開いていく意欲から
見るとそこに定住したいという面
も出てくるんじゃないだろうか。

柴田 彼らが出てきてもう10年か。
なかなか動きにくいと思う。向こ
うに帰っても何もないだろうし。
出ていけといわれるか、農業が完
全にだめという状況なら帰るだろ

うけど。

船川 エチオピアに有力な親戚がいれば帰ると思うけど、すべて投げ出した人ならばまた一からやり直さなければならない。

柴田 そうだね。生活に基盤ができたからね。そのことは一番大きい。キャンプには生活の積み上げがないけど農業にはある。

初めは定住のイメージがよくわからなかった。国連から定住しろ定住しろといわれ、家も国連から提供しようというのをJVCは断ってきたという歴史がある。今は定住とは生活の基盤があることだとわかってきた。

中岡 キャンプにいて農業に携っていない連中というのは、食べものにすがりついている感じがする。仕事をしなくても定期的に食糧をもらえるから。

柴田 JVCがソマリアに入って5年経ったわけだ。JVCにも難民にも少しずつ基盤ができてつつあるね。ソマリアには形としての積み上げがある。向こうの社会のことともわかってきた。

ざっくりばらんにいえば、こういうことをよく聞くね。「前のやり方じゃだめだ」って。正直いってムツとくる。それは限界だったと思うけど、だめじゃなくて、そういう積み重ねがあったんだ。

船川 まあ、今も同じことが続いているわけでしょ。ソマリア社会の常識にとまどうこともある。

えらいところに来ちゃった

柴田 それはそうと、中岡さんは海外もソマリアが初めてだったんだけど、どんな感じでしたか。

中岡 まず、最初ルークに行くまではもう何ともいえない感じでしたね。ちょうど5月上旬の乾期だったものだから10メートルおき

ぐらいにヤギやラクダ、牛が死んでいる。どんな所に行くのだろうというのが第一印象でした。

そしてルークに入る手前の小高い丘に立つと白いテントがずらーっと見えて、竜巻がぼんぼーんと上がっているんです。大変な所に来たなと思いました。

柴田 えらいところに来ちゃったと。人とのつきあいはどうでした。

中岡 やっぱり素直なんじゃないかと思う。

船川 あまりにも素直なんですよ。日本人同士の話では「お前は悪い」とはいわないんじゃないですか。けれども彼らは「お前は悪い」ってはっきりいうわけです。(笑) そうかなと初めは落ちこんだりするわけですよ。

中岡 「お前はだめだ」とか。

船川 「お前はだめ」といわれて、そうかなと考えて、でもだんだんわかってくるわけですよ。そうするとあれはあれで素直なんだと。

柴田 ヘエーッ。

農業ばかりがプロジェクトじゃない

柴田 これまで農業を中心に話をすすめてきましたが、それ以外の点で変わってきたことについて説明してもらえますか。

船川 今までJVCは農業だけのプロジェクトだったんですけど、それだけでは非常に片手落ちなんで

す。単にJVCに関ってる何百人だけが利益を得ていると。ほかの人はJVCも知らないし。

地域にいるJVCとしては何なのだろうということで、難民キャンプ自体に深く関わり、コミュニティ・ディベロップメント(地域開発)をすすめていこうと、87年2月から始めました。

最初にやったことは、地域社会(難民キャンプにおける地域社会)を作っているお母さんたちがどんな生活をしているのか、家族が何人いるのか、どんなものを食べているのか、どんな不満を持っているのかについて調査しました。それに基づいて小さなプログラムを1つずつ組み立てていったのです。

ストーブ・トレーニング(七輪づくり)、英語のクラス、井戸掘り、日よけづくり、植林などです。

柴田 それでは簡単にそれらのプログラムが今どうなっているのかを説明して下さい。

船川 コミュニティ・サービスというのは、その地域にいい影響を与えるもの、もちろん地域の人々が自分たちの労働力やお金を提供してもいいぐらいにはしいと思っているものについて、JVCは材料を運んできたり買ったりします。

まずストーブ・トレーニングですが、このストーブとは七輪みたいなものです。対象者は10歳から15歳までの子供と若い女性。彼ら



水がめを作る女性たち

モデルファームの作物を売って農民に貸しつける(左が船川さん)



農民と談笑する中岡さん
(聖教新聞社提供)

はキャンプの中にもする仕事がないのです。最終的にはストーブ、灰皿、水がめを作っています。今ではそれらが難民の人たちに売れるようになりました。

柴田 いくらぐらいで売れるの？

船川 高さが60cmぐらいの水がめが400シリングです。(スパゲティ皿が50シリング)

柴田 すごいね。

船川 だけどストーブの方はあまり人々の受けがよくなかった。彼らは3つの石の上にものを乗せて煮炊きするんですが、あれだと長い木が使えるんです。で、終わったらその木をまた使える。でも七輪だといちいち木を割って突っこまないと使えない。

柴田 木が少なくなってきたから太い木を燃料にするものな。

船川 だからストーブ・トレーニングは本来の目的と違っちゃったんですよ。

柴田 そうか。それから次は？

船川 英語クラスです。英語を勉強したい人は大ぜいいるんです。まず12歳から18歳ぐらいまでの子供クラスから始めました。そして若い女性のクラス、50歳ぐらいのおじさんも来ているアダルトクラスも始めました。

柴田 へえ。けっこう幅が広いな。出席はいいの？

船川 ええ出席しています。87年の末なんですけど、子供が23人、若

い女性が26人、アダルトクラスが50人です。すごく熱心です。

柴田 次は？

船川 井戸掘りです。非常に水場から遠い地域があるんですね。試験的に掘ってみたところ水が出て、これならやっていけるんじゃないかと。手掘りで10メートルぐらいです。

JVCが道具を貸しましたが、長老などに話しかけたら自分たちでやると。で、今はそこにモスクを作っています。水はちょっとしょっぱいですが、飲料水や生活用水に使われています。洗い物のあとの水は植林した木にやっているようです。

柴田 何本ぐらい井戸は掘ったの。

船川 今のところ32本です。ハルバの方にも話を持ちかけていますが、彼らも非常に乗り気です。

柴田 次は？

船川 マーケットシェイド、日よけです。炎天下でお母さんたちが物を売っていますが、お母さんたちに何がほしいかと聞いたら、日よけがほしいというのです。JVCが資材を提供し、彼らが自分たちで作りました。

柴田 あとは植林かな。

船川 最初は単に1軒に木を3本ずつ配っていくことから始めました。1年で8000本から1万本配り、そのうち8割は1メートル半にもなっています。配った木は

イピルイピル、ネムトリー、パーキンソニアです。でもイピルイピルは非常に水を必要とするのであとで外しました。

彼らはネムトリーというのが好きなんです。葉っぱが大きくて家の前に植えると陰を作ります。

3月からはマガネイの隣のドリアンレーでも苗木を配りました。

柴田 将来的にはハルガンでもやるの？

船川 はい、今年中には植える計画です。

これまで話したのはコミュニティーサービスです。これらとは別に収入をあげる目的のインカムジェネレイティグ・プログラムがあります。これはJVCがある程度まとまったお金を貸し、それをローンで何カ月後から返してもらうのです。パン屋とかじ屋と帽子屋、それからロバの背中に水を乗せて売の水屋さんがいます。

柴田 全部うまくいっているの？

船川 うまくいっています。

プロジェクトは難民 自身から生まれる

柴田 これまでの話を聞いていると、示唆的なものをいっぱい含んでいると思いますね。要するにまず人間関係だけど、最初はお互いにも何もわからないから、言い争いもあった。彼らも援助を受けていたから何とかうまく取ってやろう

とか。親近感がわかなかった。でもだんだんわかってきたというか。長くいる意味もあるだろうし、もちろんJVCの努力もあってそういう壁を乗り越えてきたんだな。

船川 ここまで来るには長い話し合いをするしかなかったですね。彼らはただでものをもらえと思っていましたから。

柴田 ソマリアというのはJVCの代表的なプロジェクトの例だと思う。まず基礎作りがあってそれを派生させていく。農業のやり方もわかって、キャンプも豊かになって、彼ら自身も勉強していく。

船川 もちろん僕たちが教わることも多かったんですけど、彼らもJVCから知識なり、何なり持っていったと思います。

柴田 それでは最後にルークの展望とお二人の今後の予定について。中岡さんは何かイメージがありますか。

中岡 荻ノ迫さんとも話しているんだけど、農協みたいなシステムを作ったらどうかと思う。われわれが引き上げたあとも彼ら自身でやっていけるように、自分たちで組織を作っていったらどうだろうか。今のJVCのスタッフが機械などを管理し、農民たちがその使用料を支払うと。

船川 具体的にこうなるというのはよくわからないんです。僕たちは定住のための農業をやっていますが、彼らが国に帰ることになればそれはそれでいいと思います。あまり定住にこだわることはない。

柴田 将来的に彼らが帰ろうとここに住もうと彼らの自由だけど、木を植えて育てていくという、そういうことを彼らが身につけることはいいんじゃないか。

船川 具体的に何万シリングもうけたから自立なのかというと、そうもいえない気がする。ソマリア人の中では貸し借りなどしてお金が回っている。書類として見た場合はその数字に意味があるかもしれないけど、僕はあまりこだわることはないと思う。

柴田 国連に報告するには数字が必要だ。1ヘクタールあたりどれだけ収穫をあげてどれだけもうかったのか見る。でも農業をするということは単にお金をもうけるというのではなくて生活の基盤になる。援助に頼らず定住してもいいとなるのじゃないか。

船川 私が一番大切だと思うのは教育ですね。子どもたちがもっとやる気を持っていったら先は明るいと思いますね。

柴田 僕たちがいたころ何百ヘクタールも囲った植林地区があった。しかしこれは失敗したね。彼らの生活と切り離していたから。植林とはどんな木を植えるのかも重要だけど、水やりなどで日々かわっている難民たちに木を植えることの意味をよく説明しなくちゃいけない。

彼らに密着した農業であり、技術でないとうまくいかないね。技術ばかり先走ってもだめなんだ。

彼らの要請の中からプロジェク

トが広がっていく。彼らとのかかわりの中からそういうものが生まれてくるんで計画書の中からは出てこないね。

船川 僕たちの方から来年はこれでやろうというものではないと思いますね。

柴田 だから計画と現実のズレをうまくあわせていく、仲良くやるというのが基本みたいだね。

それでは中岡さん、最後に自分の予定について聞かせてもらえますか。農協を退職してたんだけど。

中岡 難しいとこ。(笑)

ある部分ではJVCでやりたいんだけど、現場に行ってもそれで終わり、帰っても仕事がない。そこが一番ひっかかる。農協もある程度期間たたないと退職できないし。

柴田 そうだね。日本の社会の現実があるからJVCもしんどくなるんだよね。そうすると、ソマリアに戻りたい気もするし、やっぱり厳しいという感じかな。船川君はどう？

船川 この1年は大学に戻り、卒業するまでがんばります。

柴田 そしてソマリアに戻り、プロジェクトが終わるまでがんばると。(笑)

船川 そこまではわかりませんが、自分が必要とされているのならまた行きたいです。

柴田 そうですね。それでは今日はこのへんでこの座談会は終わりにしたいと思います。



難民キャンプの全景（聖教新聞社提供）

〈インタビュー〉創価学会平和委員会 前田 国重さん

それぞれのNGOが有機的に連帯すればよい

創価学会平和委員会の前田国重さんが、昨年10月 UNHCR のプロジェクトとしてソマリアの JVC 農場を視察された。その時の感想を交え、創価学会の平和運動、及び NGO としての活動についてお話を伺う機会を得た。

□今回の視察はどういう目的で行かれたのですか。

— 創価学会は UNHCR の NGO として、いくつかの救援プログラムを支援しています。毎年 UNHCR の現場を調査し、どのプログラムを支援するか決めます。今回はソマリアとモザンビークに行きました。

□ソマリアの感想はいかがでしたか。

— JVC 農場はパイロットケースとしては素晴らしいんじゃないでしょうか。難民の人々を説得し、自立していこうと働きかけていく。手間はかかりますが有効的だと思います。彼らが「同じ生活を仲間にも伝えたい」と、農業技術や生き方を他の難民たちにも広げています。これは彼ら自身が納得しなければできません。遊牧民だった人々がそのようになるのには時間がかかったと思います。

□JVCでもタンザニアにおけるモザンビーク難民のキャンプで活動する計画があります。モザンビークの状況はどうでしょうか。

— 緊急性が高いですね。ゲリラや干ばつによる国内被災民が400万人前後飢餓線上にいます。道路は寸断され、長距離の移動は飛行機でないとできません。私がいた時も二百数十人の人がゲリラに殺されました。日本のメディアはこのような事態をカバーしていませんね。

□JVCはインドシナ難民緊急救援の当時から支援していただいています。いつごろから難民問題に関心を持たれたのですか。

— 難民ではないのですが、1973年にベトナム救援募金をやったのがこういう活動に関った最初です。以降、西アフリカ募金、アジア・アフリカ救

援募金をやり、79年のインドシナ難民救援募金以来、アジアやアフリカの難民救援募金を毎年行っています。

□NGOとして海外の現場で働く計画はありますか。

— お金だけの援助では十分でないということはわかっています。しかし実際にまるとプロジェクトを引き受けるというのには、いくつかの難しい問題があります。NGOとしてみな特性がありますし、それぞれが有機的に連帯していったらいいのではないのでしょうか。

□開発プログラムにも関心がありますか。

— 難民問題は、開発と表裏の関係にあるともいえます。とりわけ難民救援と受け入れ国の開発はセットになっています。開発だけをめざすプログラムもありますが、そちらの方にはまだ手がまわりません。

□今後の活動の方針とか計画はありますか。

— 何ごとにも熱しやすく冷めやすい国民性ということもあり、持続的な関心、世論の形成に少しでも役立っていききたい。そのためにも、こういう問題のチャンネルは閉じないつもりです。

今年も5月下旬に UNHCR と共催でキャンペーンを行います。

□最後にJVCに対して御要望があればおっしゃって下さい。

— あえて申し上げれば、プロジェクトが拡大するのは結構と思いますが、何とか人的なフォローができればいいですね。資金もそうですが、これまでの経験を蓄積していくことも必要じゃないでしょうか。

□わかりました。今日はどうもありがとうございました。

① Shukuri (シュクリ)

28歳，妻1人，子供2人
エチオピア・Godey州出身
ジャボレでプロジェクトを最後まで続けている責任者。

「JVCはジャボレのプロジェクトをやめることになったが，俺は，仲間を募り，この地で百姓を続けていきたい。JVCから給料がもらえないからといって，また難民に戻るのはいやだからね」

② Mohamed (モハメッド)

28歳，妻1人，子供1人
ソマリア・モガディシュ出身
主に「現金収入」プロジェクトを担当。実に誠実な人柄で，1月から会計も。通称“アオキ”。

「君にとって何が一番大切か？」と彼にきいたら，「平和と安全，食糧，健康と教育だ。これらがあってこそ人々は働ける」と答えた。

③ Mohamed (モハメッド)

23歳，妻2人，子供1人
ソマリア・ルーク地区出身
主に営農指導。通称“アブディ・ジョフ”。あまりにも“モハメッド”という名が多いため。

「アラーの神を信じ，毎日5回祈り，貧しき者を救い，ラマダンを毎年実行する。そして一生に一度はメッカを巡礼する」と言うわりに，あまり実行していない彼。

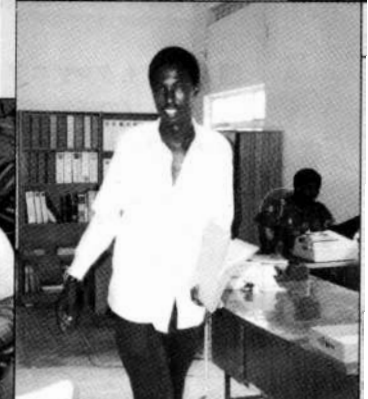
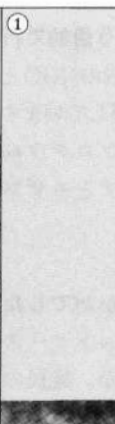
④ Abdullhi (アブドラヒ)

32歳，妻1人，子供3人
ソマリア・Johar州出身
各農場のポンプ小屋，難民用の住居，スタッフ用の宿舍などの建設が主な仕事。“デーク”(大工)と呼ばれ，ソマリア人には珍しく口数の少ない穏健な性格。

「娘がイタリアに行きたがっていてね。いいけど，寂しくなるな」

オレたちも

「頑張っているのは，日本人だけじゃないぞ」と，誇り高いソマリア人スタッフは思っているに違いない。「大して役に立たない日本人スタッフなど，来てくれるな。オレたちに任せろ」とさえ言うことがあるのだから。実際，彼らソマリア人スタッフなしでは，プロジェクトが前進しないばかりか，何か問題が起こっても，一向に解



⑤ Mohamed (モハメッド)

25歳，独身，ケニア・北東部州の出身
昨年までジャボレで活動していたが，現在は事務所専属で車の運転やシアッドのアシスタントをしている。

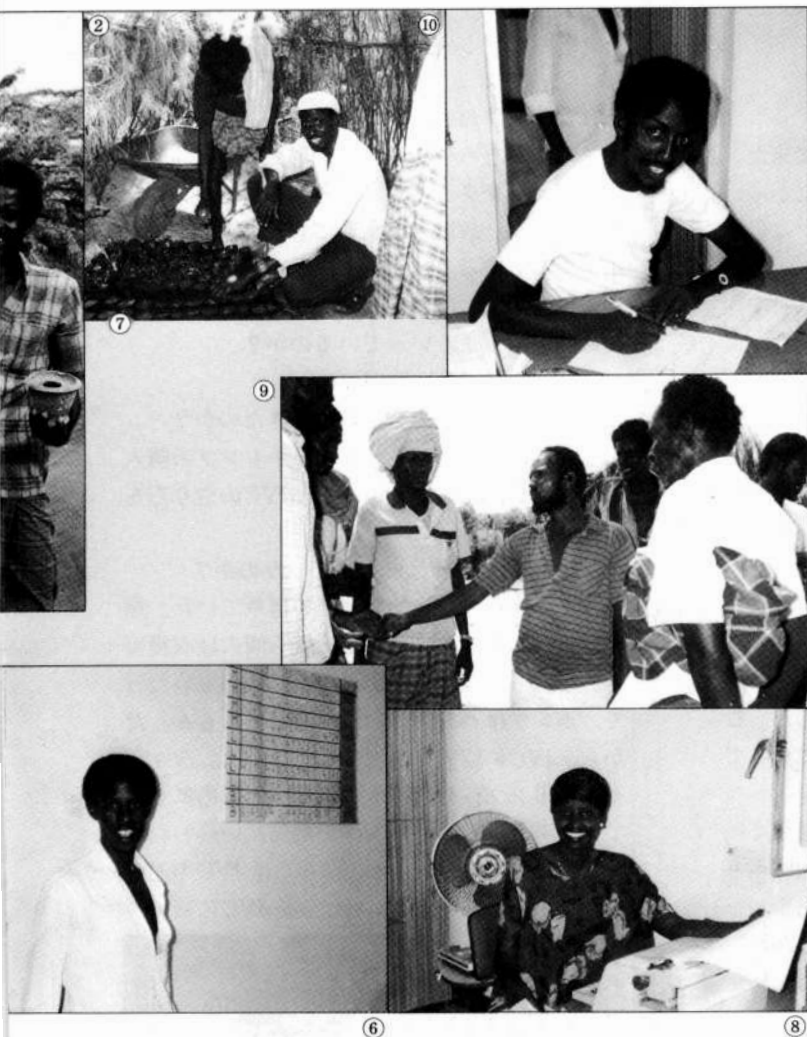
「将来は看護師か機械技術者になりたい。もちろん，専門バカにはならない。全体運営もしたいね」

がんばってるぞ!

決しない。本当に頼もしい仲間だ。

ルークでのプロジェクト開始から、ちょうど5年が過ぎた。ここで、中核となって活躍中のソマリア人スタッフ、10名を紹介したい。(注:エチオピアやケニア出身の者はもともと難民であった。)

鶴田 三芳



⑥ Abdinasar (アブディナサル)

24歳, 新婚ホヤホヤ, エチオピア・Godey州出身
歴代のJVCドライバーは、例外なく、あらっばい運転でわれわれを悩まし続けた。しかし、彼はまれにみる“優良ドライバー”だ。「俺は明るい展望を持っている。家庭にも、JVCにも。ただ、もっと機械に強くなりたいな」

⑩ Siyad (シアッド)

27歳, 現在は独身
エチオピア・Bardheere出身
事務所の仕事全般をこなす。毒ヘビ、毒グモ、サソリのいるルークを恐れている都会育ち。
「あれが欲しい、これを買ってくれて、女房はいつも言っていた。俺の給料じゃ無理だよ。だから別れた。とやかく口を出さいな女がいい。特に、仕事の事には」

⑨ Mohamed (モハメッド)

31歳, 妻1人子2人, 愛妻家
エチオピア・Kalafo州出身
ルークでのJVCプロジェクト全般を管理運営。“Gaba(泣き虫)”とあだ名されるほど、誇り高きソマリア人には珍しく、よく涙をみせる情熱家。
「援助し過ぎてはいけない。難民の主体性を極力引き出すべきだ」とJVCの役割を強調した。

⑧ Muhubo (ムハボ)

25歳, 独身
ソマリア・Mudug州出身
秘書と会計を担当。アメリカに留学したこともある有能な女性。
近々結婚という噂を小耳にはさんだので何気なくくくと「インシャラー」と軽くかわされてしまった。しかし、「子供が好きよ。でも、6人までね」とほのめかした。

⑦ Rashid (ラシッド)

28歳, 妻1人, 子供1人
エチオピア・Kalafo州出身
農場建設を全体的に指導運営している。結婚後、“真面目な男”に転身しつつある。
「JVCがここに来た時から、俺はいろいろ学んだよ。将来はエチオピアの故郷に帰り、ここでの経験を活かして、百姓をしたい」

できれば、帰りたいさ

ルーク地区には、難民キャンプの他に、難民たちが独自につくった村がいくつもある。ほとんどの者がジュバ川沿いで農業を営んでいる。そんな小さな村の一つ、シルカロールで村民（難民）3人を今年1月にインタビューした。3人は村の中心的人物で、それぞれモハメッド[M] (60歳)、アリ[A] (55歳)、ディリエ[D] (40歳)の男性である。

聞きて：モハメッド・アデン
(JVCスタッフ)

— どこから来たのか？

[M] エチオピアのシダモ州から1978年に出て来た。戦争が起きて故郷を離れなければならなかった。

— ここに移り住む前はどこの難民キャンプにいたのか？

[A] ハルガン難民キャンプだ。あんたたちJVCが住んでいるキャンプだよ。

— なぜ難民キャンプを捨ててこの村に移り住むようになったのか？

[M] わしらがキャンプにたどりついて間もなくは緊急状態が続いていた。その頃は十分な食糧が配給されていたが、年々減らされてきた。わしらは心配なんだよ、いつ配給が止まってしまうかとね。明日かもしれんし。だから、わしらはここに移り住み農業を始めたんだ。

— 今も食糧配給を受けているのか？

[D] もらっている。だが本当に微々たるものだ。ここで農業をしていかなければ、まともに食っていけん。

— キャンプから20km以上も離れたこんな遠くに村をつくり、不便ではないのか。月3回はキャンプに食糧を取りに行くだろうし、作物をルークの町に売りに行くのも大変ではないのか？

[A] そうなんだ。それがわしらの悩みなんだ。満足な輸送手段がなくて本当に困っているんだよ。だがね、ここに移って前よりずっと良くなった。

— 何が良くなったのか？

[D] モラルが良くなった。以前より幸せだよ。

— それでは、ここにずっと住めたら、故郷には帰らないのか？

[M] いや、やっぱり故郷に帰りたいさ。しかし、故郷が平和になり、わしらを受け入れてくれるよ

うにならんとね……。

— ところで、どうやって農地を得たのか？

[A] まずグループをつくり、十分調査してから、開墾したんだ。政府の農業省にも既に登録し、使用権を得ている。

— 地元民との間に問題は起きなかったのか？彼らとの関係はうまくいっているのか？

[3A] Nabad（平和だ）問題ない。

— JVCにどうして協力を要請してきたのか？

[A] わしらが住んでいたハルガン・キャンプの隣人じゃないか、JVCは。わしらはJVCのやり方をよく知っている。

— JVCが協力する前はどのようにしていたのか？

[M] ルークの商人からポンプなどを借りていた。悪い奴らだ。わしらに働かせ、奴ら商人は収穫の半分を取っていくんだからな。いくら働いたって、ポンプはわしらの物には決してならん。だから、JVCに協力をお願いしたんだよ。ディーゼル・ポンプ代や燃料代などを数年以内にすべてJVCに返さなきゃいかんが、結局払い終われば、わしらの物になるからね。わしらはJVCの連中を心から信じているし、わしらをJVCにめぐり



インタビューを受ける、左からディリエ、アリ、モハメッド。

あわせてくれた神にとっても感謝している。

— 農場では何を作っているのか？

D 前はタマネギだけだった。高く売れるんで商人がタマネギばかり作れと言ってたからな。JVC になってからは、自分たちが食べるためのトウモロコシを主に作っている。一部は売って金に換えているが。

— 将来はどうするのか？

M さっきも言ったように、できれば故郷に帰りたいんだが、当分先の見通しが立たないので、ここに定住したい。JVC も引き続き協力してほしい。

— 食糧配給カードを将来返すつもりはあるのか？

D 今回はこの土地での初収穫があったばかりだが、将来も収穫が続けば、カードは返すつもりだ。

— この村には何家族住んでいるのか？

A 15家族、約130人がいる。

— どのくらいの家畜がいるのか？

M 山羊と羊をあわせて70頭前後、牛が4頭、ロバが4頭だ。乳を飲んだり、その肉を食べたり、売ったりしている。山羊を25頭も持っている家族もあれば、まったく持っていない家族もある。

— あなたたちは何人の妻と子供がいるのか？

M わしは3人の妻と13人の子供がいる。

A わしは2人の妻と、(ここで一時、子供の数を指折り数えてから)13人じゃな。

D わしは妻が3人と子供が9人おる。

— この村の生活で困っているのは運送手段の他に何があるのか？

M トウモロコシやソルガムの粉ひきが少なくて困っている。健康にも問題がある。

— 病気になった時など、あなたたちは今どうしているのか？難民キャンプにあるRHU(難民保健局)で診てもらっているのか？

A 今は伝統的な医療とコーラン(イスラム教の教典)を読むことで治している。この村には薬がないからね。また、子供たちの教育も問題なんだ。

— キャンプにあるような小学校が必要なのか？

D それもそうだが、子供たちのモラルが悪くなってしまった。将来が心配だ。わしらが生まれ育った所とキャンプではまったく文化が違う。ブッシュと都会くらい違う。難民キャンプで生まれた子供たちや小さい頃ここに来た若い連中は、難民キャンプの生活と文化に染まってしまった。



村人たちの話を聞く

わしらが子供の頃は、朝から晩まで家畜の世話で野原を走り回っていた。だがどうだ、キャンプの子供たちは。朝から晩まで砂埃にまみれながらトラックの後を追いかけているだけじゃないか。モラルが良くなるはずがない。

— その通りだ。援助に慣れっこになってしまっている。子供たちはトラックが食べ物を生み出すものと思っているのだろうか。

M うむ……。本当に子供たちの将来が心配でならない。

— 最後にあなたたちの将来についてもう一度ききたい。農業で食えるようになり、食糧配給カードも返して難民ではなくなったとしよう。そんなある時、故郷が平和になりそこで生活できるような状況になったら、あなたたちはどうするのか？その時、このルークに留まり、農業などで生計を立てていくのか？それとも故郷に帰るのだろうか。

A たとえこの地で食っていけても、やはり故郷に帰るだろう。わしらは自分たちの生まれ育った故郷をよく知っている。忘れられんよ。故郷に帰りたい。

一時間ほどのインタビューが終わる頃、大きな熱帯の太陽が地平線に沈んでいった。彼らは、いつものようにゴザを敷き、メッカの方角に祈りを捧げ始めた。焚火があちこちで暖かく灯る。夕飯の支度だ。

(記：鶴田)

ラオスプロジェクト開始に向けて

プロジェクトの合意

前田 初江

はじめに

1987年6月に開催されたラオス開発のための円卓会議（T&E 72号掲載記事参照の事）終了後、ラオス婦人同盟（以下LWUと記す）よりJVCに、婦人を対象としたプロジェクトの援助要請があった。それは、保育者養成施設の建設という内容である。

11月にJVCの谷山が再度ラオスを訪れ、LWUの意図するプロジェクトの場所、目的等を確認した。そこでJVCが専門家を派遣してプロジェクトのための事前調査をする事を条件に、援助協力する意向のある旨を伝えた。LWUはこれを承諾したので今回の事前調査が実行したのである。こうして一気に書いてしまえば交渉は順調に進行してきたと思われ勝ちであるが、ここまで到達するには長い前述部分を経なければならなかったのである。

いくつかの難関

そもそも、JVCがラオス国内での活動を決意したのは、インドシナにおいて唯一ラオスで実現している、難民の本国自主帰還プログラムを支持する事が、今後の難民問題解決の糸口になると思ったからである。ところが、ラオスにとって難民問題は、最も触れてほしくない問題であるばかりでなく、どこの馬の骨ともわからないNGOが、しかも地方で活動する事に難色を示した。ビエンチャンのUNHCRは、JVCとの協力実現に向けて政府と交渉中であるが、まだまだ時間を要するであろう。そこでJVCは、難民とは直接関係はないが、村落レベルでの生活水準を向上するような仕事ができれば、難民発生要因を少しでも緩和できるのではないかと考えたのである。こういう折、円卓会議に参加する機会を得たのである。

そして、今回のLWU要請のプロジェクトの内容に関して話し合いの場を持つ事や、LWUが事業計画申請書（プロポーザルレター）作製に手間取っていた事、そして何よりも、ラオス入国ビザ取得が困難で、これに多くの時間を費さなければならなかった事等の難関があったのである。

かくて私たち（谷山、前田）は、事前調査直前になって送られてきたLWUがプロポーザルと見なす9

万2723USドルの建設見積書のみを携えて、事前調査の成功を翼に託してはるばるとメコン川を飛び越えて、出掛けて行ったのである。

プロジェクト内容

LWUは、今までの交渉の滞りの補充でもするかのように、調査のためのスケジュールを用意して待っていてくれた。私たちは毎日ビエンチャン近隣の保育園や協同組合、LWUの支部の活動状況を見学したり、教育省、保健省を訪問して新プロジェクトの説明及び協力依頼をしたりした。滞在期間中、プロジェクト内容に関して4回、建物に関して3回の話し合いが持たれた。その他、カンプチア大使館表敬訪問、UNICEF、UNHCR、日本大使館等をも訪問する機会を持った。

そして今回4回にわたる話し合いの経過概略と結果は下記の通りである。

まず、LWUの要請によるナショナルトレーニングセンター（以下NTCと記す）自体の建設援助は規模も大きく無理だとして、JVCがNTCの前段階として、小規模のセンターに於ける訓練から始める事を提案した。LWUは、婦人を対象にしたプロジェクトは、当初の保育教育訓練も含む生活改善指導員の訓練であるという主旨を明示し、JVCの提案を受け入れた。

建物に関しては、LWUがビエンチャン市公共建設流通事業所に依頼して設計図が作製された。LWUの当初の見積額が二度変更され、最終的に、今回縮小した部分は増築可能であるとし、増築か否かは今後のプロジェクト運営状況いかによるとする事になり、4万1242USドルで合意するに至った。

訓練の内容は以下の通りである。

目的：婦人を対象に生活改善指導員を養成し、全国の、特に地方の生活改善を図る。

対象：全国の婦人

期間：第1回

6カ月（変更の可能性有り）

受講者は第2回訓練以降の受講者の指導に当たる。

第2回以降

1カ月間



◀ノンハイ村協同組合のメンバーと
(右から3番目が前田さん)

▼テキスタイル工場の仮託児所を見学



▶
国立芸術師範学校の女生徒
を演奏する



人員：第1回 20名

第2回以降：50名

訓練回数：年2回

訓練内容：概略

◎母子保健

応急処置，出産間隔，産前産後の健康管理，
予防接種，離乳食，子供の成長観察記録，
母乳による育児，補水療法等。

◎保育教育

教材作り，保育の環境の考察，子供の観察，
保育施設にて保育実習。

◎家事一般

食生活（食品知識，飾りつけ，調理器具の
工夫開発，果実ジュース，果実酒の作り方，
おやつ作り等）

住生活（部屋の飾りつけ，小物作り，住ま
いの衛生管理，花の飾り方等）

その他（家計簿のつけ方，趣味等）

◎農業関係

野菜，肥料，土壌，家畜の病気，飼料等の
一般知識等

以上の事項は今後検討を重ねて，詳細な計画を立

ててゆくことになる。

また，プロジェクトは建物建設の資金援助のみで
なく，運営に際してもJVCからの協力人員の受け入
れを承諾した。

都市部と地方の差を縮める

センターは，最初LWUの希望していた規模の約
半分に縮小されて建設される予定になったが，LWU
が企画するNTCの布石として開始し，除々に運営を
軌道に乗せていく努力をLWU，JVC共にしてゆか
なければならないと思う。

ラオスの社会主義は，今年で12年目を迎える。解
放以来，全国民が国家建設に参加し，その効果は直
接，間接的に人々の暮らしに反映し始めている。そ
れは，各地で協同組合やLWU支部のプロジェクトや
活動が推進されていることからもうかがうことがで
きる。

しかし，人々の生活状態に言及すれば，経済流通，
交通輸送，情報伝播等の環境不備により，都市部と
地方の隔差は大きい。だからこそLWUが計画する地
方レベルの生活改善指導員養成のプロジェクトは必
要であり，意義ある事であると確信する。

JVCNEWS

JVC神奈川

盛況だったアジア市民フォーラム

3月19, 20, 21日の3日間、神奈川県小田原市で「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム」(略称: アジア市民フォーラム)が開催されました。

草の根レベルの海外協力が活発になってきたなか、市民とNGOによって下から積み上げて開催にこぎつけたこのフォーラムに対する関心は高く、当初実行委員会が考えていた参加者300人の規模は、マスコミの報道もあって、切間際から申し込みが殺到し、最終的に500人を越えるものとなりました。

実行委員会では企画段階から、従来の国際会議のように言いっぱなし聞きっぱなしというのではなく、テーマを細分化してじっくり話し合える場作りをしようという心がけてきました。参加者が膨れ上がったため、最初の思惑のようにはいきませんでした。海外協力の幅広い分野から集まった方々の問題提起や事例報告に、各プログラムで活発な討論が行われました。

最初のセッションである「はじまりフォーラム」では、インド、タイなどアジア各国からお招きした5人の海外ゲストにより、それぞれの専門分野から活動報告がありました。その中で、タイのサムルーン博士(保健医療)は、「農村社会に外部から無遠慮



アジアのNGOのメンバーを迎え、NGOミーティングが開かれた。

に援助が入ると、伝統的な村社会の機能が崩壊し外部への依存体質が形成される」と発言し、第3世界への外国からの一方的な援助や商品の流入を批判しました。

フォーラム最終日のシンポジウムでは、インドのパンドゥラングさんが、「NGOで活動している人には、3つの勲章(award or price)がある。第1に周囲の人間から奇妙な奴だと思われること、第2に孤立すること、第3に無視されること。NGOで働くにはこういった状況に耐える覚悟が必要だが、全ての良いことはこれら少数者から始まる」と語り、聴衆からの盛大な拍手を受けました。

その後の「アクションプログラムの発表」では、早くも名古屋と大阪のNGOから次期フォーラム開催地の名乗りがあがりました。今後もこのようなフォーラムが日本全国に広がり、それとともに人々の第3世界への関心と実践活動への参加が高まることが期待されます。(山口誠史)

カンブチアのテレホンカードができました



あなたと話したい。カンボジアの未来、世界の平和。

JVC 日本国際ボランティアセンター ☎(03)834-2388

こちよいくメールのリズムに乗って少女たちのからだが動き出す。よく伸びた手足、ピンとした背筋。ここはプノンペン郊外にある芸術学校だ。ポルポト時代を生きのびた踊り手たちが中心となって、クメール舞踊の再興をめざしている。

JVCは技術学校/ワークショップを運営するかわら芸術学校にも鏡を寄贈したり、カンブチアでは手に入らない舞台衣装の材料を提供した。

このテレホンカードは50回使えて、カンバ代も含め1000円です。お申し込みはJVC事務所まで。

新しく会員になった方々 (1987年8月1日～1988年3月31日)

〔一般会員〕

岩城佳鶴, 清水沙羅, 畠中まりこ, 小澤紀美子, 本城和彦, 三本菅 亨, 三本菅 繁, 藤波かをり, 佐々木禮子, 青谷匡美, 大石道子, 河内節美, 三本菅 和史, 清水昭三, 細山 健, 伊藤あい子, 落合恵子, 吉岡俊江, 平松文子, 富里るみ子, 中野迪子, 川崎 剛, 本田直美, 神林順子, 国貞みどり, 佃 道子, 緒方啓子, 山口 武, 山口節子, 坂本純子, 大角幸枝, 前田和子, 稲葉武司, 長田澄子, 上岡直子, 高野史枝, 加藤民雄, 多田由美, 徳武恵子, 鳥山 剛, 森本美智子, 米山綿子, 只野久美子, 佃 朋子, 菊池一徳, 福富 優, 町井松代, 山田順子, 谷口美樹子, 森 裕之, 長縄泰子, 小林正樹, 今泉益正, 細谷嘉男, 佐野久美子, 森 千代子, 大森富士夫, 本田暁子, 以上58名

〔活動者会員〕

谷本栄子, 中下 力, 穴見令子, 瀬口圭司, 高野賢, 曾我 泉, 村田広平, 山中美幸, 本波三郎, 白井久美子, 西 由美子, 釘村千夜子, 岸野真紀子, 前田初江, 園田奈水映, 工藤美美子,

以上16名

〔学生会員〕

鈴木孝之, 根田行宣, 小山祐子, 青野昭裕, 赤坂泰央, 松田和彦, 中川 東, 水谷美恵子, 岸田尚子, 増原善之, 菊池義弘, 福本扶佐子 以上12名

〔団体会員〕

該当なし

〔賛助会員〕

増田忠男, 仲井間宗孝, 中村尚司, 柏木 茂, 松本貞義, 笹岡小夜子 以上5名

カンプチア

出発を前にした

本田さんと釘村さんに聞く

いよいよカンプチアのラインプログラム(母子保健)が始まります。JVCはカンプチア保健省のもとで、ラインセンターの運営にあたります。4月10日に出発する医師の本田 徹さんと、助産婦の釘村千夜子さんにカンプチアでの活動の内容と、現在の抱負について語ってもらいました。

本田さんはSHARE(国際保健協力市民の会)の代表として誰にでもやさしい内科のお医者さんです。カンプチアに行っている3カ月は勤務先の病院が休職扱いにしてくれました。

今回の仕事はラインセンター建設のために必要な各省庁や国連機関、NGOとの交渉です。またラインセンターの運営に向けて、給食やワクチン、保健教育などのプログラムのアドバイスもします。ラインセンター自体予防医学の場なので、今回は医師としての出番はほとんどないのだそうです。

カンプチアでの活動について「SHAREはエチオピアの活動の後、主体的なプロジェクトがなく、早く現場を持ちたいと思っていました。カンプチアは必要性、緊急性についてもそれにふさわしい場だと思っています」とラインプログラムに対する意気込みを語ってくれました。

またSHAREとしてはJVCのプログラムの中で動



本田 徹さん



釘村千夜子さん

くばかりでなく、独自にカンプチアに関していく予定があるようです。すでにカンプチアのために40万円ほど集め、内視鏡も送る準備をしています。

釘村さんは古いJVCのメンバーなら記憶にあるはずです。1982年1月から83年11月までタイのクロントイスラムで看護婦として働いていました。

1982年といえば行きたい人は誰でもボランティアとして参加できた時代です。自分がどんなことをしたらいいのか、みつけるのにずいぶん時間がかかったそうです。そこで気がついたことはスラムの母子にまつわる問題の多いこと。看護婦としての仕事よりも、栄養、保健など病気予防の必要性を感じました。その後釘村さんは助産婦としての資格をとり、現在は“受胎調節指導員”だそうです。

釘村さんのカンプチアでの仕事はラインセンターにおける母子保健活動と、将来的にはスタッフの訓練を計画しています。「生死をさまよったカンプチアの人々に、赤ちゃんがどのように迎えられているか興味があります」と、釘村さんは述べています。

正木 幹生さん



今は懐かしい『苦学生』のイメージも

「JVCに始めて、一番困ったのは、アルバイトができないこと。だって用事を頼まれるかもしれないと思うと、先の予定が立てられないでしょう」

と話してくれる正木幹生さんは、いつもにこにこ笑っています。頼まれるといやと言えない性格で、見かけとは無関係に(ゴメン!), JVCの頼もしい女性方のアイドル的存在です。その正木さんはこの4月から、筑波大学の大学院 環境科学研究科(言わずと知れたJVC代表岩崎さんのいるところ)に進学しました。大学在学中には週3回くらいJVCのオフィスにきていましたが、差額の20円を浮かすため、地下鉄の駅一つ分くらい歩いてから電車に乗る姿が見られたものでした。

最初にJVCに現われたのは、大学1年のとき。代々木にある青少年オリンピックセンターとかで開かれたあるシンポジウムに、コメンテーターとして出席した森山(今は柴田ですが)久寿子さんの元気さが印象的だったからだといっています。

「そのときは、例のJVCの『愛想なし』でしばらく来なかったんですが、一年以上たって東京医科歯科大学でやったシンポジウムに来たときに岩崎さんと前川さんに捕まったんです。『学習会の世話役をあれ』って」

そうなんです。JVCのスタッフはいつも忙しいせいか、訪問者に“つれない”ときがあるんです。

1年目は学習会の世話役が中心でしたが、2年目、つまり4年になってからは、本誌の取材、発送、定住難民プロジェクト、ブイ・ムンさんを見守る会、それに、始まるまで待てないのプロジェクトと大活躍。毎日のようにオフィスに顔を出す日が続きました。特に、法学部のせいもあって、ブイ・ムンさ

ボランティア登場2

んの裁判に関しては、資料を作ったり通信を書いたり大変だったようです。

学内では変わりの『懸賞荒らし』

「JVCにかかわってきて、一番いいことは、見聞が広まったというか、見方が深くなったというか、そういうことですね。ぼくは日赤の海外交流のボランティアをしたり、大学の1,2年のころに、学内の論文募集に『海外協力』や『NGO』の論文で応募したりと、それなりの知識や関心は持っていたつもりです。しかし、大きな方向性のようなものは変わっていないんですが、具体性、というか、現実性というかそんなものが加わりました。いまでは、あんなもの書かなきゃよかったと思うくらいです」

と、正木さんは謙遜しますが、その論文は入選して二度にわたって数万円を得たとか。決して書かなきゃいいというレベルではないもののようです。

「それと、ちょっと変なんですけど、来るところがあるというのはいいですね。いつも熱烈に歓迎されるというのじゃないけれど、それなりに相手にして貰えますからね」

と学生らしい感想。失礼を承知で“学校では多少変わり者という評価でしょう”という、正木さんは残念そうにうなずきました。

4月から晴れて筑波大学院生になる正木さんですが、最初の活動は、日本赤十字の代表として、オーストラリアで行われる会議に出席すること。太平洋を囲む14カ国から28人の代表が集まるという重要な会議のようです。といってもJVCのオフィス周辺で評判になってるのは、往復の飛行機のこと。日本航空、それもエグゼクティブクラスで行けるというのが、PとかEとかいう航空会社を利用することが多いJVC族の羨望の的になっているのです。ちなみに、季節によって違うのですが、東京・バンコク往復で、JALは格安の会社より2~3万円高いのです。

筑波に引っ越す正木さんは、これまでのようには事務所に来れなくなります。それでも今年はJVCカレンダーの製作販売を担当するとか、“なんとか赤字は出さないようにしないと”と今から緊張しているそうです。

第三世界の都市問題を研究したいという正木さん、バンコクのスラムにJVCの開発プログラムの担当者として赴任する、そんな日があるといいですね。(A.G)

JVCプロジェクト

1988年3月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 加藤志保, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, 柴田久史 アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション JVC説明会—毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時 3月19～21日に小田原市において“アジア市民フォーラム”(市民とアジアをむすぶ国際フォーラム)が開かれ, 3日間で500人以上の市民が参加した。		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト 1月25日, 全国社会福祉協議会会議室において難民連絡協議会が開かれ, 事務局長の星野のほかに定住難民関係で山口と落合が出席した。全社協の方から昨年に引き続き「定住難民フォーラム」開催の提案があり, 今後開催に向けて検討を重ねていく。 3月1日, 『もしもしあのね』第5号が完成し, ボランティアの人たちと発送した。 3月20日, “アジア市民フォーラム”の定住難民分科会で, JVCから落合が事例報告を行った。分科会では今後も参加した各市民グループ間の連絡を緊密にしていきたいことが確認された。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 横浜キウニスクラブ, 全国老人クラブ連合会, 国際交流ホスピタリティ・トラスト, 禅林寺龍華会基金, 「チャリティ・ウォークかながわ」	山口誠史, 落合正幸, 谷本栄子, 他約60人
	●東金農場 東金農場の今後の発展について, 地元の支援者とJVC代表等の話し合いが続けられている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助 他団体に先がけて87年8月より開始したfood for workにより, 現在のところ飢餓の予防に成功している。しかし次の収穫期まで1年間村人の生命を守るため, 約65万人を対象とした食糧配給を続けざるを得ない。食糧, 輸送力, 倉庫の確保を急いでいる。 ●総合的復興促進 1. 植林 農民, 母親, 子供を対象に指導, その後家庭植林用に苗木を配布。土壌・水源保全用に植えつけを終えた。 2. 保健, 栄養 家庭菜園, 離乳食の訪問形式による奨励が母親自身の手で行われつつある。地元診療所とともに母子健康相談も実施している。 3. 給水 清潔な飲料水確保のため, 泉の保護をしている。種子銀行, 農業教室も引き続き行っている。	CRDA, 西本願寺, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全国老人クラブ連合会, バンド・エイド, 東京グリーン・ワーク, ジャパン・タイムス, モラロジーMIRC, Tree for lifeの会, 栄光学園, 「チャリティ・ウォークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟	加納 妙, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, 山田 盛 イエットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 UNHCRは農業などにより難民の定住を推し進め、援助を徐々に打ち切る方向をより明確にしてきた。一方、世界銀行の資金でジュバ川中流にダムを造る計画が進んでおり、もしこれができると現存のJVC農場(155ha)の約1/3は水没してしまう。このような外的状況の変化も考慮し、このプロジェクトの今後の展開について現場スタッフを中心に現在検討中である。 農場では4月からの雨期の準備をしている。 ●植林 これまで農場とマガネイキャンプ内を植林してきたが、非常に好評なため、ドリアンレー・キャンプとハルガン・キャンプでも苗木を配る準備をしている。 ●現金収入 バン屋、水屋、かじ屋などは順調に収入を得ている。 ●コミュニティー・サービス ハルバ・キャンプ周辺でもこのサービスを始めるため現在調査中である。	UNHCR, 創価学会青年平和会議, 仏国土をつくろう会	金子一弘, モハメッド・アブディ, シアッド, 荻ノ迫善六, 中野周二, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ, ムハボ, アブドラーヒ, アブディナサル
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	ついに雨期のきざしが現れた。キャンプ内の植林に向け、準備を整えている。順調な降雨を切に望む。	朝日新聞厚生文化事業団, 砂漠に種をまく人の会, R.I. ジャパン	ジュクリ
カンボジア (ブノンペン カンダール県 プレイベン県 スバイリエン県)	1. サンタビエップ(平和)技術学校, ワーク・ショップ。 1月12日より、技術学校の試みとしての機械工初心者向研修が3カ月のコースで開始された。タukkanとディエンが指導に当たり、57人の訓練生が出席している。 2. 井戸掘り/給水(OXFAMと共同) TONE(井戸掘り機)→カンダール県[87年度21本]ハイドロリック()→プレイベン県, スバイリエン県で続行中。[87年度51本] 農林省水利局はTOM-3を活用して給水活動を行うため、カンボット県でのかんばつ地域を調査中。4月以降、JVCのワークショップで2本、他にカンボット県38カ所で井戸掘りを行う予定。 3. ブレック・ピノウ孤児院援助 8月13日、男子寮の補修完成。雨漏りもなくなり非常に明るくなった。雨といも水タンクも完成し、あとはトンレサップ川からの給水と浄水システムを残すのみとなった。 4. RINE・プログラム(母子保健) 3月9日、臨時に建てられたRINEセンターが完成し、それに2週間ほど先立ち母子の登録と母親に対する教育などの活動が開始された。以前からブノンベン郡病院で働いていた助産婦、看護婦6人と、3カ月間の訓練を受けた若い准看護婦9人、そして2人の准医師が活動に取り組んでいる。	関東青年会議所 平和基金 全国老人クラブ連合会, 創価学会青年平和会議, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILCチャリティグループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会 覚法寺,「チャリティ・ワークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, [カウンター・パート] タック・カン, アム・ディエン, メアス・サメット, ゲット・ソーン (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師
ラオス (ビエンチャン)	●生活改善指導員養成センター 婦人を対象に母子保健、幼児教育、家政一般、農業訓練等の一般知識修得並びに実習を教育省、保健省の協力を得て行うセンターの運営援助及び技術協力を予定。 センター開設予定は1989年1月。	木幡律子チャリティコンサート	谷山博史, 前田初江

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンビモン・チャイブーン、石原淑子、カモン・ミンムアン、スンニー・ティチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 今月初め日本に受け入れられた約20名のクメール人がバナニコムに移動した。現在今年度の一学期の試験を行っている。4月から二学期に入るが、定住インタビューによる生徒および教師の減少が懸念される。	UNHCR, SV (Stichting vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム 清水俊弘
国境のサイト2, ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食・栄養保健教育 長い話し合いの結果、やっとJVCのあとをCOERR (タイの団体) が引き継ぐことに決まり、3月31日を目度に着々と準備が進められている。 サイト2の北と南の間に新しくオープンマーケットができ、タイ人が商売をしている。 ついに貯水池の水位が最低となり、現在キャンプに山から引く水のパイプをUNBRO (国連国境援助機関) が建設中である。	WFP/UNBRO	スラボン, ブーム、ウィンナイ, スピチャ、チューン, 前野博美、北代るり
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ●日本定住予定者 ①日本語学習の基礎 (読み、書き、聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ●日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。 3月11日カンブチア難民28人がカオイダンからバナニコムに到着。21日より授業を始める。一方2月1日に勉強を始めたラオス難民は16日で勉強を終え、18日にバンコクへ移された。彼らは31日に日本へ出発する予定。	天理教千葉	フォード・順子, 鶴岡善和, アナン・ブダミリンプラ ティープ, ウィバ・ロンブリック
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 毎週土曜日、アソク地区で子供クラブ (図書活動、あやつり人形など) を開いている。 ●クロントイ図書館 図書の整理を行っている。 クロントイの他の地区でも図書活動できないか調査している。 ●移動図書 JVCと地域住民の手によってナンシー図書館が完成した。 ●農村開発 4月12日にM村で学校給食プログラムのセレモニーを行うため“パパ”で資金を集める準備をしている。 “パパ”とは行事やお祭りの前に集める寄付のこと。	モロロジ-MIRC, JOFIC, We Love Asia Tree for life の会 雄勝町町内寺院会 国際ソロプチミ スト駿河	バティト・チャンスリヤオン サムルアイ・ジョンヨークラ ン、リーラ・クンナロン, コメン・スンサマラヤ
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, パラワン島)	●国際移民委員会 (ICM) — 第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	石井弘代

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円
・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (3月小計 47,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (3月小計 139,986円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (3月小計 12,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (3月小計 649,460円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (3月小計 12,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (3月小計 816,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (3月小計 1,000円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (3月小計 0円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (3月小計 0円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (3月小計 70,000円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (3月小計 932,936円)
- エチオピア緊急救援募金 (3月小計 127,000円)

編集後記

▶編集部からのお詫びが2つ。

ここのところ本誌の発行が遅れぎみです。催し物の期日に間に合わないこともあり申しわけなく思っています。どなたか手伝って下さる方はいらっしやいませんか。取材などのできる方は大歓迎です。なお、5月はお休みです。79号は6月の発行になります。

78号の12ページ、穴見令子さんのお名前が穴水令子さんになっていました。どうも申しわけありませんでした。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
加入者名—JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (3月小計 1,941,952円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

昭和63年4月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX: 03(835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会
会内 ☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円